石火の機

石火の機と申すも、ピカリとする電光のはやきを申し候。たとへば右衛門とよびかくると、アッと答ふるを不動智と申し候。右衛門と呼びかけられて、何の用にてか有る可きなどと思案して、跡に何の用か抔いふ心は、住地煩惱にて候。止りて物に動かされ迷はさるゝ心を所在煩惱とて凡夫にて候。又右衛門と呼ばれて、オッと答ふるは諸佛智なり。佛と衆生と二つ無く、神と人と二つ無く候。此の心の如くなるを、神とも佛とも申し候。神道、歌道、儒道とて道多く候へども、皆この一心の明なる所を申し候。

といひ、一切の思想分別を離れたる本源本妙の心を諸佛不動智とし、此の一心を明むるを諸道の本源としたので、佛教で『萬法唯心』といひ、儒教で『一以て之れを貫く』といひ、神道で『まごころ』と語るも歸する所は此の一心を明かすので、楠木正成が曾て大和路を旅行して居つた時、途に一人の禪僧に遇ひ、行を共にしつゝいろ〳〵禪の話を聞いて心に大に得る所がありましたから『某は楠木多聞兵衛正成と申す田舍侍でござる』と名乘ると其僧すかさず『正成ッ』と呼びました。『應』と答へると『這裡これ何の在る所ぞ』と問ひ返しました。『正成ッ』と呼ぶは彼れにして『應』と答ふるは我れ正成、サア此の間に何があるか、『呼べば應ずる底何者ぞ』正成これを聞いて豁然として悟る所あり、ます〳〵心を禪要に傾けたと申すことでありますが、此の石火の機に於て豁然として悟りました心の光りは、如何に言語で說明せんとしても出來るものではありません。

此一心を能く說くとて、心を明めたるにてはあるまじく候。水の事を講釋致し候とても、口はぬれ申さず候。火を能く說くとも、口は熱からず、誠の水、寔の火に觸れてならでは知れぬもの也。書を講釋したるまでにては知れ申さず候。食物をよく說くとても、ひだるき事は直り申さず候。說く人の分にては知れ申す間敷候。世の中に佛道も儒道も心を說き候得共、其の說く如く其の人の身持なく候心は明かに知らぬ物にて候。人々我が身にある一心本來を篤と極め悟り候はねば明さず候。

とありまして水が冷たい火が熱いと何程講釋したとて解るものではありませんが、其の人の手を水の中へ入れゝば冷たいといふことの納得が行き、火の中へ入れゝば熱いといふことも納得出來るやうに、冷煖自知といひまして自ら修行して之れを明らめぬ以上は、丁度食物の講釋ばかり聽いても腹のはらぬと同樣で役に立つものではない、何事も自分の實驗體得からこれが其の身の行ひに現はれてこそ明かに其の心を知つたといふべきであります。

しかも此の心は人々我が身に具へて居るのでありますが、恰も鏡の曇つたり錆びたりして居るやうに、外界の刺戟は此の鏡を曇らし、內心の欲求は此の心を錆びつかして居るのでありますから、此の曇りを去り錆を除いて明皎々たる本心の光りを出すべく努めねばならぬのであります。

七、心の置き所

此の心の置き所に就ては本文の意味を具體化して澤庵禪師と柳生宗矩との間に左の如き問答が傳へられて居ります。禪師の問ひと宗矩の答へと交互して、

『試合の時、心を何處に置くぞ』

『敵の身の働きに置きます』

『敵の身の働きに心を奪はるゝぞ』

『敵の太刀先きに置きます』
『敵の太刀先きに心を奪はるゝぞ』
『敵を斬らんと思ふ所に心を置きます』
『敵を斬らんと思ふ所に心を奪はるゝぞ』
『我が太刀先きに心を置きます』
『それでは我が太刀先きに心を奪はる』
『それでは我れ切られじと思ふ所に心を置きます』
『それその思ふ所に心を奪はるゝぞ』
『それでは心を臍下丹田に收めます』
『それは又臍下丹田に心を奪はるゝぞ』
『それでは一體何處に置いたらよいのですか』
との問ひに對して禪師は判然と、
『何れにも置くことなかれ』
と喝破せられたといふので、本文の意も亦之れに外ならぬので、更に其の何處にも置かぬ妙を示して、

何處にも置かねば、我が身に一バイに行きわたりて、全體に延びひろごりてある程に、手の入る時は手の用を叶へ、足の入る時は足の用を叶へ、目の入る時は目の用を叶へ、其の入る所々に行きわたりてある程に、其の入る所々の用を叶ふるなり。萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺

何れにも置くことなかれ

くべきなり。思案すれば思案に取らる程に、思案をも分別をも殘さず、心をば總身に捨て置き、所々に止めずして、其の所々に在て用を外さず叶ふべし。

とあつて心を何れにも置かざるが故に自由自在に手のいる時は手、足のいる時は足と要に應じて使はるゝので一つの所に止めて置けばそれに縛られて自由自在を得ないが、何れにも置かねば全身これ心、敵の働きによつて臨機に變に應ぜらるゝので、其の一所に置くを偏に落るといひ、總身に心を伸べて一方へ片寄らさぬを正位といひ、心の正位を保つてこそ石火の機にて應ぜらるゝので、心を一方に置くと、置きたるより引き出さんとする所に間が拔けるのであります。されば、

心を繫ぎ猫のやうにして餘所にやるまいとて、我が身に引止めて置けば、我が身に心を取らるゝなり。身の內に捨て置けば、餘所へは行かぬものなり、唯だ一所に止めぬ工夫是れ皆修行なり。心をばどつこにも止めぬが眼なり、肝要なり。どつこにも置かねば、いづこにもあるぞ。

と道破せられて居ります。心、全體にわたれば明鏡止水の如くで、來るに應じて其の影を映すので、勝海舟先生は此の理を外交の上に應用して左の如くに語つて居ります。

明鏡止水

『心は明鏡止水の如しといふ事は、若い時に習つた劍術の極意だが、外交にも此の極意を應用して少しも誤らなかつた。かういふ風に應接して、かういふ風に切り拔けるなど、豫め見込を立てゝ置くのが、世間の風だけれども、これが一番わるいよ。おれなどは、何にも考へたり目論見たりすることはせぬ、たゞ〳〵一切の思慮を捨てゝしまつて、妄想や雜念が靈智をくもらすことのないやうにしておくばかりだ。卽ち所謂明鏡止水のやうに、心を磨き澄して置くばかりだ。かうして置くと、機に臨み、變に應じて、事に處する方策の

浮び出ること、恰も影の形に從ひ、響の聲に應ずるが如くなるものだ』

これは外交ばかりでなく處世の妙諦も亦此處にありと申すべきであります。

八、本心妄心

上來動く心と動かぬ心とを見て參りましたが、此の動かぬ心を不動智と申し、これは全身全體にひろがつて行き渡らぬ所はない本心で、動く心の方は却て一所に止りて、それに執着して居るので之れを無明煩惱住地と申します、禪師は、

本心と申すは、一所に留らず、全身全體に延び廣ごりたる心にて候。妄心とは何ぞ思ひつめて一所に固まり候心にて、本心が一所に固まり集りて妄心と申すものに成り申し候。本心は失ひ候と所々の用が缺ける程に、失はぬ様にするが專一なり。

本心とは何ぞ

と云はれて居りますが、『大乘起信論』には此の本心を眞如とし、こゝへ無明煩惱の風が吹いて妄心の波風を起し、此の波風が更に無明の風や妄心の波に煽られて妄境界とて、有りもせぬものを有ると思ふ迷ひを起し、此の迷ひが心を一所に止める執着心となるといふやうに說いて居りまして、初め一念の動き、それが大なる迷ひとなるので、もと〳〵西へ行くべきものを東に行つたのだから、行けば行く程遠くなつて本心を見ることが出來なくなるのでありますから、新陰流の祕歌として、

いづくにも心住まらば棲みかへよ
ながらへば又もとの故鄕

といふのが傳へられて、此の本心を失はぬことが、何よりも肝要でありますが、これを失ふ奴があるから困るのであります。

或る時、原坦山――これは明治時代の禪の大德であります――が、鳥尾得庵――これは軍人にして有名な禪の居士――に『此頃はどうも本心を落す奴があつて困る』といひますと、得庵は、『落した奴があれば拾つた奴があらう』といひますと、坦山が『衲が拾つた』といひますから得庵が『拾つたら落し主に返してやつたらよからう』坦山『あまり澤山あるので何れが誰のだかわからぬ、今に警察にでもゆつくり屆けてやらうと思つて居る』というて大笑ひしたといふ話がありますが、此の本心決して落したのではない、當分姿を隱して居るので、もと〳〵本心と妄心とは別のものでなく、白隱禪師の『坐禪和讃』に、

衆生本來佛なり　水と氷の如くにて
水を離れて氷なく　衆生の外に佛なし

といはれて居ります通り、本來本法身の我等も佛も同じ本心を持つて居りますので、此の事を澤庵禪師は、

たとへば本心は水の如く一所に留らず、妄心は氷の如くにて、氷にては手も頭も洗はれ申さず候。氷を解かして水と爲し何所へも流れるやうにして、手足をも何をも洗ふべし。心一所に固り一事に留まり候へば、こほりもかたまりて自由に使はれ申さず。氷にて手足の洗はれぬ如くにて候。心を溶かして總身へ水の延びるやうに用る、其の代りに遣りたきまゝに遣りて使ひ候。是れを本心と申し候。

といはれて居ります。本心は水、妄心は氷で、水は能く方圓の器に隨うて應用自在でありますが、我が〳〵の我執で固つた氷のやうでは圓いものに容れるにしても四角いものに容れるにしても其の器を代へるか、氷

を割らねばならぬのであります。

九、有心の心、無心の心

右の妄心を有心の心といひ、本心を無心の心として說明を重ね、

有心の心と申すは、妄心と同事にて、有心とはアルココロと讀む文字にて、何事にても一方へ思ひ詰まる所なり。心に思ふ事ありて分別思案が生ずる程に、有心の心と申し候。無心の心と申すは、右の本心と同じ事にて、固より定まりたる事なく、分別も思案も何も無き時の心、總身にのび廣ごりて全體に行渡る心を無心と申す也、どつこにも置かぬ心なり。石か木かのやうにてはなし、留る所なきを無心と申す也。留れば心に物があり、留る所なければ心に何も無し、心に何もなきを無心の心と申し、又は無心無念とも申し候。

思はじと思ふ心

といひ、更に、

一所に定り留りたる心は、自由に働かぬなり。車の輪も堅からぬにより廻るなり、一所につまりたらば廻るまじきなり。心も一事に定れば働かぬものなり。心中に何ぞ思ふ事あらば、人の言ふ事をも聞きながら聞えざるなり、思ふ事に心が留まるゆゑなり。心が其の思ふ事に在りて一方へかたより、一方へかたよれば、物を聞けども聞えず。見れども見えざるなり。是れ心に物ある故なり。

といひて無心と有心との區別を示して心に物ある時は其の物に心を捉はれて自由ならず、此の物を去らんと思ふ心も亦一つのかたまりとなつて我が心の自由を妨ぐるをいひ、古歌を示して、

思はじと思ふも物を思ふなり
思はじとだに思はじやきみ

と示されて居ります。思はじと念ふ一念あつても有心の心であつて無心の心ではありません。禪の初祖達磨大師に對して二祖慧可が、

『和尙、我が爲めに心を安んぜしめよ』

といふと達磨は直に、

『心をもち來れ』

とやつた。ソコデ慧可が、

『心を覓むるに不可得なり』

心といふものは探し求めて何處にもございませんとの意であります。スルト達磨は、

『我れ汝の爲めに心を安んじ畢る』

というたといふ話があります。何處にもなければ惱む所もないのだから、これ程安心なことはない。例へば無病健全の人は手が何處にあるやら、足が何處にあるやら忘れて居りますが、足に少し傷でもあると足の存在が確かに心に止り、手に腫物でも出來れば手の存在が毎に氣になり、平生は齒の存在など忘れて居る人でも齒が痛み出すと齒の存在がハツキリ心に止るやうなもので、心の存在のハツキリ解る時は心に惱みがあるので、『これを覓むるに不可得』なる境涯は、これ無心の心となつた安心の境涯であります。

一〇、水上打胡蘆子

水に浮ぶ瓢箪

此の無心にして一所に止まらざる姿を形容するに一つの禪語を持ち來つて『水上に胡蘆子を打ち捺着すれば卽ち轉ず』といふので、胡蘆子は瓢箪のことであります。禪師は此の語を解して、

胡蘆子を捺着するとは、手を以て押すなり。瓢を水へ押せば、ヒョツと脇へ退き、何としても一所に止まらぬものなり。至りたる人の心は、卒度も物に止まらぬ事なり。水の上の瓢を押すが如くなり。

といはれて居ります。卽ち瓢箪を水に浮べて右へ押しても左へ押しても押すがまゝに轉々として少しも止ることなく、しかも水に浮ぶといふ本來の心は失はぬやうに心を持つて、世の荒波に漂はされても沈むことなく、物に應じて人に接して圓轉自在なるべき至人の心を示されたのでありまして、これには次ぎの文句が必要となります。

一一、應無所住而生其心

これは金剛經の文句であります。禪師解して、

此文を讀み候得ば、オウムショジウニショウゴシンと讀み候、萬の業をするに、せうと思ふ心が生ずれば、其のする事に心が止るなり。然る間、止る所なくして心を生ずべしとなり。心の生ずる所に生ぜざれば手も行かず、行けばソコに止る心を生じて其の事をしながら止まる事なきを、諸道の名人と申すなり。此の止まる心から執着の心起り、輪廻も是れより起り、此の止まる心生死のきづなと成り申し候。

不二の理

と說いて居られます。卽ち『應に住る所なくして其の心を生ずべし』で、住る所があつてはそれに捉はれて心の自由がきゝません、此の心の自由のきかぬ所から物に執はれる執着の心となり、此の執着によつて罪業を造り、生死に流轉するのであると示されたので、佛敎では此の執着の心を惑卽ちまよひといひ、此の惑によつて身に行ひ口で云ひ心で思ふことを業といひ、業が原因となつて生死の苦を受け、此の苦によつて惑を造り惑によつて苦を受け、惑業苦々々々と展轉して極りなきを輪廻といひ、これが生前死後に亙ると說くのでありますから、こゝに『輪廻もこれより起り、此止まる心、生死のきづなと成り申し候』といはれたのでありますが、今の眼目は此の止まる心を去ることで『花紅葉を見て花紅葉を見る心は生じながら其所に止らぬを詮といたし候』とて慈圓の歌に、

柴の戸に匂はん花もさもあらばあれ
　　ながめにけりな恨めしの世や

とあるを擧げて、花は無心に匂ひぬるを我が心に止めぬを至極とすると敎へられて居ります。『心を生じて其の事をしながら止まる事なきを諸道の名人と申す』とありますのは、先きにも申しましたやうに、『名人は上手の上の一修行』で上手といはれるのは技巧ですが、名人となると技巧を離れて其の技藝と自分とがピタリと合つて二つにして二つにあらざる所謂不二の境涯に到るのでありますから何處というて心の止る所がなくそれが其の儘道に叶ふので、圍碁の名人が『勝たうと思うてやれば、そこに心を取られ、負けまいと思うて打てば石に無理が出來る、たゞ一目々々正しく打つ外はない』と申しましたのは、さすがは名人の箴言で、孔子の『心に欲する所に從つて矩を踰えず』といはれた聖人の域も此の應無所住而生其心の現はれに外ならな

いのであります。道元禪師は此の意を詠みて、

水鳥の行くもかへるもあとたえて
　されども道は忘れざりけり

といはれ、波間に浮ぶ水鳥の其の路は消えて自由自在に泳ぎ廻つて其の路を忘れぬ手に從つて爲す所、其の儘、道に叶つて、少しも之れと離るゝなき境涯であります。

しかし此の境涯に到るには一足飛びに到れるものでもなし、『上手の上の一修行』である以上、先づ上手にならねばならぬので、それには儒教の所謂敬といふことが必要であるとて、

敬の字をば主一無適と註を致し候て、心を一所に定めて餘所へ、心をやらず、後に拔て切るとも切る方へ心をやらぬが肝要の事にて候。殊に主君などに御意を承る事、敬の字の心眼たるべし。佛法にも敬の字の心有り、敬白の鐘とて、鐘を三つ鳴し、手を合せ敬白す、先づ佛と唱へ上る之の敬白の心、主一無適、一心不亂、同義にて候。然れども佛法にては、敬の字の心は至極の所にては無く候。我が心を捉へて亂さぬやうにして習ひ入る修行稽古の法にて候。此の稽古年月つもりぬれば、心を何處へ追放しやりても、自由なる位に行く事にて候。

とあります。敬を主一無適とすることに就ては程子に『主一これを敬といひ、無適これを一といふ』とあり朱子は『敬は主一無適の謂』といひ、又『主一は唯だ是れ心專一にして他念を雜へず、無適は唯だこれ走作せず』とありまして一意專念事に當るので、主君を敬して他事なきは忠であり、佛を敬して他事なきは信でありまして其間に雜念、妄想が入りましては眞の忠義も出るものでなく、眞の信仰も起るものではありませ

ん。何事につけても主一無適といふことは肝要で一心不亂といふもこれと同義であり、先きに佛言を引いて『心を一所に制すれば事として辨ぜざるなし』といふのも、同じ意義であります。しかし佛法にては之れを至極なりとせず、此の一心不亂の修行、功を積んで、强て一心不亂にならうと思はず、此の心を何處へ放ちやつても、自由自在なる應無所住の位に入らねばならんので、主一無適、一心不亂といふ間は『心の餘所へ行くのを引き留めてやるまい、やれば亂るゝと思ひ卒度も油斷なく心を引きつめて置く位にて候』とて、雀の子を猫の前に置き、其の猫を繩で縛つて近づけないやうにして置くやうなもので、繩を解けば直に雀に飛びつくからとて心を猫のやうに縛つて置いては自由がきかぬ、此の猫を能く馴らして繩なぞで縛らず何處へでも行き度い所へやり、雀と一所に居つても捕らぬといふ所まで進むのが應無所住の位であるとの例を擧げ、さて、

電光影裏に春風を斬る

貴殿の兵法にあて申し候はゞ、太刀を打つ手に心を止めず、一切打つ手を忘れて打て人を切れ、人に心を置くな。人も空、我も空、打つ手も打つ太刀も空と心得、空に心を取られまいぞ。鎌倉の無學禪師、大唐の亂に捕へられて切らるゝ時に、電光影裏斬二春風一といふ偈を作りたれば、太刀をば捨てゝ走りたると也。無學の心は、太刀をひらりと振り上げたるは、稻妻の如く、電光のピカリとする間、何の心も何の念もないぞ。打つ刀も心はなし、切る人も心はなし、切らるゝ我も心はなし、切る人も空、太刀も空、打たるゝ我も空なれば、打つ人も人にあらず、打つ太刀も太刀にあらず、打たるゝ我も稻妻のピカリとする內に、春の空を吹く風を切る如くなり。一切止まらぬなり。風を切つたのは太刀に覺もあるまいぞ、かやうに心を忘れ切つて、萬の事をするが上手の位なり。

といはれて居ります、無學禪師は名を祖元といひ支那の人で、國に居られた時、元の兵隊が押し寄せて來て

頭上に白刃を振りかざして將さに斬らんとした時、泰然として、

乾坤、孤笻を卓つる地なし
且喜すらくは、人空、法亦空なり
珍重す大元三尺の劍
電光影裏に春風を斬る

との偈を唱へられた其の豪膽に敬服して、元の兵も刃を收めて退いたといふ有名な高僧で、鎌倉執權北條時宗が其の德を慕ひ、これを我が國に迎へ鎌倉圓覺寺の開山といたしましたので、こゝには此の偈の結句のみを擧げられたのでありますが、其の大要は本文に說明せられて居ります通りで、佛敎では一切萬法は因といふ主要原因と緣といふ之れを助けて結果を生ぜしむるものとの掛け合せで出來て居るといたしますので米の種子は稻を生ずるの因、これを助くる雨とか土とかは緣で、此の因と緣とを離れては何も生ずべきでない、これを『中觀論』といふ書物に『諸法は皆な是れ因緣によつて生ずるが故に我々之れを空と說く』とありまして一切皆空、此の我が身も原素と原素、我が心も感覺や想念の集り、これを離れて何もあるべきものでないといふのを人空といひ、其の原素とか想念とかいふものも亦もと〳〵因と緣との掛け合せで、これを離れて別に存するものでないと見るのを法空といひまして結局一切皆空へと進んで參るのであります。既にこれ一切皆空、乾坤卽ち天地の間、何處へ此の孤笻を卓つべきぞ、ソンナ所があるべきでない、打つ人も空、打たるゝ人も空、打つ太刀も亦空、『珍重す大元三尺の劍』は丁度電光がピカリと光つて春風を斬るやうなものだとの意義であります。しかし本文にも『空に心を取られまいぞ』とあります通り、空に心を取られては又一方に

偏するので、こゝにいふ空は無いといふことではなく、『般若心經』に『色卽是空、空卽是色』とありますやうに空にして有、有にして空なので、恰も明鏡の面には何もないから萬象の影が有る如く、これを眞空妙有と申しまして蘇東坡の詩に、

素紈、描かず、意、高き哉
倘し丹靑を着くれば、二に墮し來る
無一物の處、無盡藏
花あり、月あり、樓臺あり

といふのがあります。素紈に何も畫のかいてない所に頗る氣高い所を見る、もし之れにベタベタ繪具を塗りつけては第二第三に墮ちる、此の何にも無い處に無盡の藏の如く色々な趣があるのだとて、花もあれば月もあり樓臺もあるというたのであります。本文に『かやうに心を忘れ切つて』とあるのには眞空で應無所住、『萬の事をするが上手の位なり』とあるのは妙有で而生其心であると見て味ふべきで、これを藝術に應用して、

舞を舞へば手に扇を取り足を踏む、其の手足を能くせむ、舞を能く舞はむと思ひて、忘れきらぬは、上手とは申されず候。未だ手足に心止まらば業は面白かるまじ、悉皆心を捨てきらずしてする所作は皆惡しく候。

こゝに上手とあるは私の先きにいうた名人の位に當るので、如何なる藝でもよくせんと思うてやる間はまだ藝と心とが離れ離れになつて居るので、此の『よくせん』とする心を忘れ切らねば所作皆な惡〻なるとの

ことで、先代延壽太夫が弟子を戒めるに『藝といふものは、能く演らうと思へばアテ氣がさしていけないから、何時でも無難にやるつもりで語れ』というたといふことであります。これ亦確かに名人の至言として味ふべきであります。

一二、覺放心

孟子に『學問の道他なし其の放心を求るのみ』とありまして、人々の本來持つて居る良智良能の本心、何時の間にか離れ出でたのを放心といひ、これを求むるのを學問の道といたしたのであります。禪師これを解して、

離れたる心を尋ね求めて、我が身へ返せと申す心にて候。例へば犬猫鷄など放れて餘所へ行けば、尋ね求めて我が家に返す如く心は身の主なるを、惡しき道へ行く心が逃げるを、何とて求めて返さぬぞと也尤も斯くあるべき義なり。

家を離れ出た犬猫でも之れを求むるのに何故これを求めぬか、これを求むるは當然であるといひ、さて又これに反對あるを示して、

然るに又邵康節と言ふものは、心を放すを要すと申し候、ハラリと替り申し候。斯く申したる心持は、心を執らへつめて置いては、繫れ猫のやうにて身が働かれねば、物に心が止らず、染まぬやうに能く使ひなして、捨置いて何所へなりとも追放せと言ふ義なり。

といはれて居ります。この邵康節は孟子よりズット後の宋代の學者で、其頃大分禪の影響もありましたが、全く反對に『心放つを要す』というて本心を求め探して之れをしまつて置かずに自由に放つて、しかも其の爲めに汚れざること蓮の泥中にあつて濁りに染まぬやうにせよとの意で、全く反對のやうでありますが、澤庵禪師は之れを調節して、

『稽古の時は孟子がいふ覺放心と申す心持よく候、至極の時は邵康節の心要放と申すにて候』

といひ、先きにもあつた主一無適や一心不亂は放心せしめぬやうにするので、之れは修行中は必要で、修行中から心が行き度い所へ行つて居つては修行も出來ぬので、此の間は玉を磨くが如く本心を放たぬやうにして磨き上げねばならぬが、さて磨き上つた玉は泥の中へ入れても其の光は失はぬので自由自在に放つを要するので、先きの覺放心は靜中の修養で、靜かに心を修めて之れを放たしめないので、後の心要放は中峰和尙が具放心といはれた如く心を放つ動中の修養、卽ち靜中に修め來つた所を動中に自在に應用せねばならぬ。靜中の修養に固づてしまふのを禪師は『上段終には取られずして下段にて果るなり』といはれて居ります。

上段と下段

昔、支那に許由といふ人がありました。箕山といふ所のほとりに居つて修養功を積んで居りましたので、堯帝が之れを召して位を讓らうとせられますと、我が心を亂す厭なことを聞いたというて耳を潁川の水で洗つたといふ話があります。或人が此の許由耳を洗ふ圖を描いて水戸光圀に贊を乞ひますと、光圀は、

耳洗ふ心の水は清けれど
　　ながれは汲まじ世を救ふ身は

と書かれたといふことであります、許由はまだ覺放心の境、光圀の方が心要放の境に入つて居ると見るべきであります。

一三、不停留と前後際斷

次ぎに二つの短い文を別立さして此の本が終つて居ります。一つは、

急水上打毬子念々不停留

と申す事候とて、

急にたぎつて流るゝ水の上へ手まりを投ぜば、浪にのつてぱつぱつと止らぬ事を申す義なり。

とありまして我が心の一念々々停滯する所なきこと急水上の毬子の如くなるべきをいひ、今一つは、

前後際斷

と申す事候とて、

前の心をすてず、また今の心を跡へ殘すが悪しく候なり。前と今との間をば、きつてのけよと言ふ心なり。是れを前後の際を切て放せと言ふ義なり。心をとゞめぬ義なり。

とありましてわれ〳〵の心は少しも停滯することなく流るゝ水の如く前の心は滅して今の心となり、今の心は滅して後の心と流れ行くので、昔、希臘の哲人が足を流れに投じて『足を入れたる時の水は、もう今の水ではない』といはれたやうに前のは滅し後のは生じ、前滅後生々々々々と流れ行きますのに、前の心を捨てずして返らぬことに心を奪はれ、何うなるやら計られぬ後の事を屈託して思ひ煩つて却つて今の事が疎末になるのであります、今此の一刻のことに誠心誠意なること、それがやがて一日を善くし一年を善くし一生を善くする所以で、古歌にも、

今日一日の覺悟

さしあたる今日の事のみ思へたゞ
　かへらぬ昨日知らぬ明日の日

とありますが、これは何も刹那主義で其場限りにやれといふことではなく、返らぬ苦勞に今日の業を怠り、今日一日に考へずして又明日のあることだとて憂を殘さぬやうに、常に卽今、一大事到來と覺悟して此の一生に再び遇ひ難き今此の時を疎にしない心持こそ、終に生死の前後を際斷して行くことが出來るのであります。澤庵禪師曾て人の需めに應じて『一日再び晨なり難し』と題し、

はかなしや思へば日々の別れかな
　昨日の今日に又も遇はねば

と書いて光陰の虛しく渡るべからざるを示されました。最後に道元禪師の言を擧げて此の意味を明にいたすことにいたします。

『學人は必ず死ぬべきことを思ふべき道理は勿論なり。縱ひそのことを思はずとも、暫く先づ光陰を徒らに過さじと思ひて、無用のことを爲して徒らに時をすごさず、詮あることを爲して時をすごすべきなり』

一四、宗矩への忠言

以上で『不動智神妙錄』は終つて居るのでありますが、最後に、

內々存じ寄り候事、御諫め申入れべく候由、愚案如何と存じ候得共折節幸ひと存じ見及び候處、あらまし書き付け進め申し候。

とあつて忌憚なき忠言を試みて居られます。これ獨り柳生宗矩への忠言なるのみならず、修身、齊家、治國の要道として拳々服膺すべきの教訓と思ひますから、煩を厭はず、これをも此に抄出いたします。

貴殿事、兵法に於て今古無双の達人故、當時官位俸祿世の聞えも美々しく候。此の大厚恩を寢ても覺めても忘るゝことなく、旦夕恩を報じ忠を盡くさんことのみ思ひ玉ふべし。忠を盡くすといふは、先づ我が心を正しく身を治め、毛頭君に二心なく人を恨み咎めず、日々に出仕怠らず、一家に於ては父母に能く孝を盡くし、夫婦の間少しも猥になく禮儀正しく、妾婦を愛せず、色の道をたち、父母の間おごそかに道を以てし、下を使ふに私のへだてなく、善人を用ゐ近付け、我が足らざる所を諫め、御國の政を正しく、不善人をば遠ざくる樣にするときは、善人は日々に進み、不善人はおのづから主人の善を好む所に化せられ、惡を去り、善に遷るなり。此の如く君臣上下善人にして、欲薄く奢を止むる時は、國に寶滿ちて、民も豐かに治り、子の親にしたしみ、手足の上を救ふが如くならば、國は自ら平に成るべし。是れ忠の初なり、この金鐵の二心なき兵を、以上樣々の御時御用に立てたらば、千萬人を遣ふとも心のまゝなるべし。卽ち先きに言ふ所の千手觀音の一心正しければ、千の手皆用に立つが如く、貴殿の兵術の心正しければ、一心の働き自在にして、數千人の敵をも一劔に隨ふが如し。是れ大忠にあらずや。

と不動智神妙の理を以て身を修め家を齊へ君に仕ふべき忠道を說き、更に其の心の正しくして人を使ふに愛憎好惡を以てすべからざるを力說して、

其の心正しき時は、外より人の知る事もあらず、一念發する所に善と惡との二つあり、其の善惡二つの本を考へて、善をなし惡をせざれば、心自ら正直なり。惡を知り止めざるは我が好所の痛あるゆゑなり

或は色を好むか、奢氣隨にするか、いかさま心に好所の働きある故に、善人ありとも我が氣に合はざれば善事を用ひず、無智なれども、一旦我が氣に合へば登し用ひ好むゆゑに、善人はありても、用ゐざれば無きが如し。然れば幾千人ありても、自然の時、主人の用に立つ物は一人も之れあるべからず。彼の一旦氣に入たる無智若輩の惡人は、元より心正しからざる者故、事に臨んで一命を捨てんと思ふ事、努(ゆめ)あるべからず。心正しからざるものゝ主の用に立たる事は、往昔より承り及ばざるところなり。貴殿の弟子を御取立なさるにも、か樣の事之れ有る由、苦々しく存じ候。

と苦諫し、

國は善人を以て寶とすといへり、よく御體認なされ、人の知る所に於て私の不義を去り小人を遠ざけ賢を好むこと急になされ候はゞいよ〳〵國の政正しく御忠臣第一たるべく候。

といふ等、移して以て現代人を戒むべきで、其の柳生宗矩の三代將軍の寵臣たるを以て諸大名より賄賂を持ち來るを戒めて、

欲に義を忘れ候事、ゆめ〳〵之れ有るべからず候。

といひ、更に宗矩の亂舞を好みて諸大名の邸へ行き又、

挨拶のよき大名衆をば御前に於ても强く御取成しなさるゝ由、重ねてよく〳〵御思案なさるべく候。

といふ如き當時の權臣たる宗矩に對して侃々諤々此の言を爲し、しかも其の中に友情の溢るゝ、如何に親交の間柄でも、禪師の如き偉人にあらずんばいひ得ないことであります、本書は次ぎの和歌を以て筆を擱かれて居りますから、私も亦之れを以て此の話を終ることにいたします。

心こそ心迷はす心なれ
心に心こゝろ許すな

不動智神妙錄（終）

昭和十六年一月二十一日　印刷
昭和十六年一月二十七日　發行

修養大講座　第九卷

著者　加藤咄堂
東京市澁谷區代々木山谷町一〇八

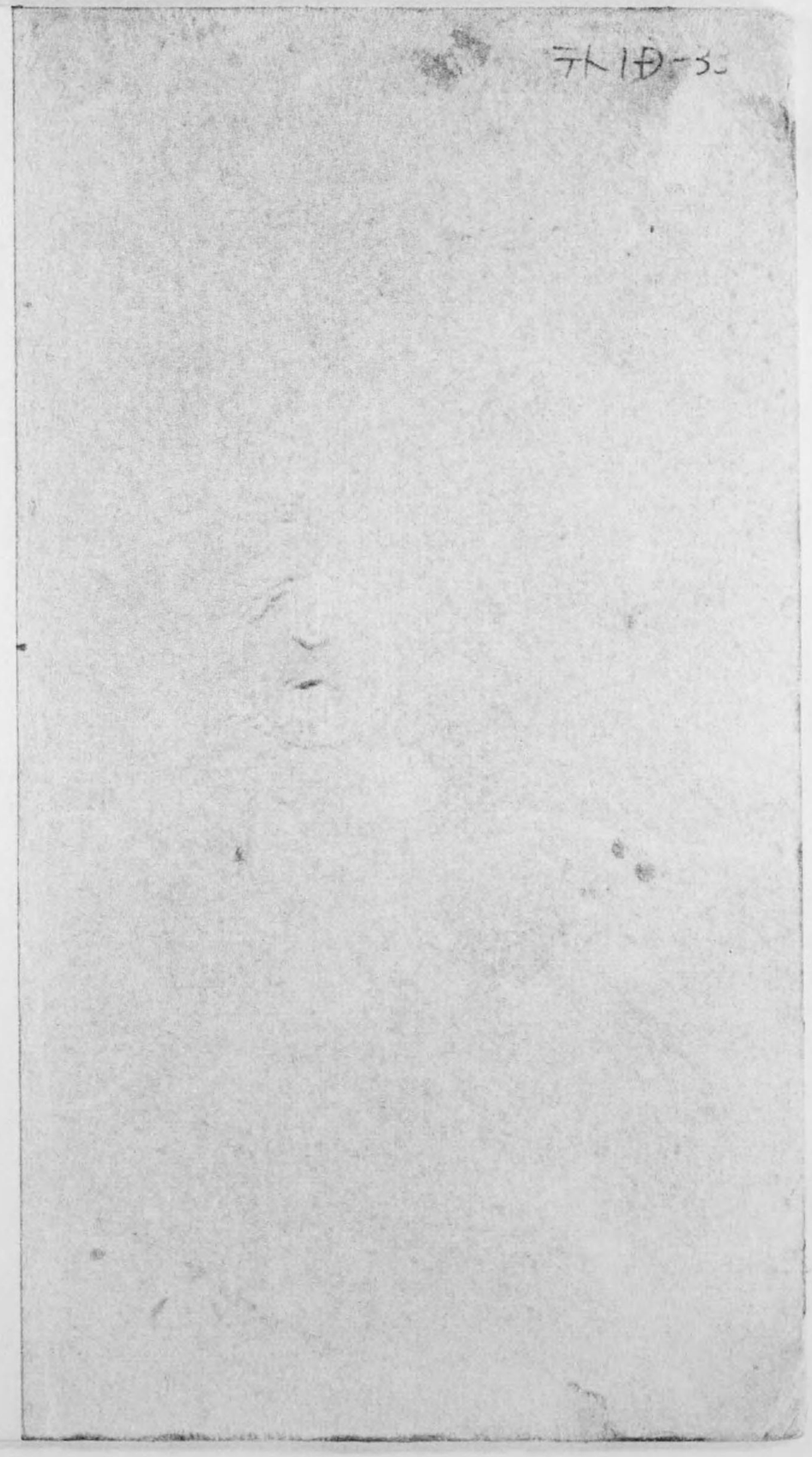
發行者　下中彌三郎
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

印刷者　齋藤道太郎
東京市日本橋區吳服橋三ノ五番

發行所　東京市日本橋區吳服橋三ノ五　平凡社
電話　日本橋二一五七番　二一五八番
日本橋二一五九番
振替口座東京二九六三九番

（第三回配本）

共同印刷整版・印刷

1D-33
平の巻

終